

スチューベンの魅力を発信



鶴田町が生産量日本一を誇るスチューベンぶどうが収穫期を迎え、町では観光ぶどう園やスチューベンまつりが開催されるなど、スチューベンの魅力を多方面に発信しました。

日本一！スチューベンぶどう祭り



△甘さたっぷりのスチューベンを味わう子どもたち

「日本一スチューベンぶどう祭り」が10月7日（土）から9日（月）まで、道の駅つるた「鶴の里あるじゃ」で開催され、訪れた約3万8千人が鶴田町の旬の味を楽しみました。

スチューベンの食べ放題に参加していた弘前市の千葉心寿ちゃん（みこと）は、「甘くておいしいところが好きです」と弟の縁志（えにし）さんと黒く色づいた実を笑顔でほおばっていました。期間中は、スチューベンぶどうが特別価格で販売。先着100人にスチューベン大福がプレゼントされたほか、県内外の道の駅フェアも同時開催されました。

また、町が友好交流協定を締結する鹿児島県さつま町が特産の梨やみかん、さつま揚げなどを販売し、連日多くの観光客でにぎわいました。

スチューベンぶどうの魅力をPR



△青山副知事（右）にスチューベンをPRする相川町長（左中央）

10月3日（火）、相川町長と津軽ぶどう協会の成田会長らが青森県庁に青山祐治副知事を訪ね、今年産のスチューベンの生産状況報告とスチューベンぶどう祭りのPRをしました。

相川町長は「スチューベンまつりも間近に迫り、さらには生産者自らがワイナリーを造った。町がスチューベン尽くしになり、活性化につながる」、成田会長は「今年産も糖度は高く、味は例年を上回っています。今後は販売に力を入れ、もっとPRをしていきたい」と話していました。スチューベンを試食した青山副知事は「おいしいですね。スチューベンを全国の皆さまに食べてもらうために県も生産拡大に向けて支援していきたい」と述べていました。

どえんぜき

土淵堰が世界かんがい施設遺産に登録されました

弘前市から鶴田町を流れる疏水「土淵堰」が、国際かんがい排水委員会（ICID）が認定する世界かんがい施設遺産として登録されました。

世界かんがい施設遺産は平成26年に創設。農業の発展などに資する、ため池等の貯水施設や水路などを保存することが目的で、建設から100年以上経過した施設が対象となります。今回、土淵堰のほか国内では3施設が選定され、日本からの登録は31施設となりました（県内では、平成26年に選ばれた稻生川（十和田市など）に次いで2施設目の登録）。

土淵堰は全長14.6kmの水路で1644年に津軽3代藩主津軽信義公により築造。西津軽地域の用水源として、弘前市やつがる市、五所川原市、鶴田町の約8300haの水田にかんがい用水を供給しています。

また、土淵堰に用水を補給する廻堰大溜池は1660年に完成。貯水量約1100万トン、面積約280ha、堤防の延長は日本一を誇る約4.1kmで、県内では最大の貯水湖です。周辺には、富士見湖パークや鶴の舞橋が整備され、津軽富士見湖の愛称で地域住民の憩いの場となっています。

平成18年には農林水産省の疏水百選に選ばれるなど、土淵堰は地域の歴史的資産として認識されているとともに、人々に癒しと安らぎの場を提供する地域の宝として、後世に受け継がれている点が評価されました。



△土淵堰